私たちが考える相模原のまちづくり

グリーン・コンパクトシティ

都市産業研究会 2012提言書

はじめに

私たちの考えるグリーン・コンパクトシティとは、決して経済成長を否定するものではなく、得意分野を持ち、街を支える原動力としての資源を最大限に活かすためのものです。

まだ手をつけられていない豊富な土地、自然。屈指の技術力と生産力。そして相模原の将来を本気で考えている地元愛に満ちた住民。それらのすべてが財産です。

将来の相模原を検討するにあたっては、単年度で物事を進めるのではなく、長期にわたる予算計画を早期に取り入れ、官民一体で検討することが重要と考えます。

たとえば“ 新しい公共 ”が芽生えるように官に頼らず是是非非で前例踏襲しない新しい発想を取り入れること。街づくりを支える経済やそのノウハウにも民の力を最大限に活用すること。福利厚生も健康運動を提起して病気予防に力を入れ、健常者を多くするなど、成すべきことはたくさんあります。

日々変化を続ける時代という大海原で、しっかりとした羅針盤を持って舵を取る時です。それは中国の古事「まずは隗より始めよ」に習い「まずは相模原から始める」という決意です。

おわりに

この提言書は、私たちが愛する街、相模原の目指す姿を、行政の指針だけではなく、産業経済人の視点で検討しました。「さがみはら・グリーン・コンパクトシティ」構想は、相模原のまちづくりの基となり、既存の都市とは一味違った産業文化、歴史、自然環境を活かしたまちづくりを考えるものです。

魅力ある、そして夢のある相模原の未来を、ぜひ一緒に創りましょう。

TOSANKEN ♥ SAGAMIHARA

The Society for City and Industry

The Sagamihara Chamber of Commerce and Industry

都産研（とさんけん）とは

（僕たちの「とさん犬」はここからきています）

都市産業研究会の略称で、相模原商工会議所の中にある研究会です。会員が集まり、相模原市の産業基盤や街づくりについて、広く調査・研究して、産業人の立場から市の将来を創造、提案、支援を行う集まりです。様々な仕事の人たちが自由に発言し、より良い相模原にする為に毎月集まっています。現在は自立都市を目指した産業やまちのありかたを研究中です。

この内容に関するご意見やご質問は、下記までお寄せ下さい。

著　作：　相模原商工会議所　都市産業研究会
初　版：　2012.4.1
編集長：　中嶋幸夫
会　員：　原保美・中嶋幸夫・小野弘・平栗文夫・八木千露・白井一郎・唐澤章三・佐藤博・井上栄次・長崎克央・中村昌治・荒井達雄・安西登・安藤悦郎・浦上裕史・金子政明・桑島克也・小泉計雄・小島明・櫻井正友・櫻内國富・清水紳一郎・白井憲二・杉岡芳樹・高木明・高木幸夫・田口幸男・武内英雄・中山秀男・新津裕史・西浦佐知子・西野清一・萩原理介・原正弘・古橋裕一・八木大二郎・矢田正和・山口浩・山中仁・吉田修一・渡邉敦・渡邊知雅子（2012.3.31 現在）

相模原商工会議所　都市産業研究会
〒252－0239　相模原市中央区中央 3－12－3
ＴＥＬ（代表）042－753－1315　（担当）042－753－8131　ＦＡＸ042－753－7637
http://www.tosanken.net/

街が抱える問題点（現状と展望）

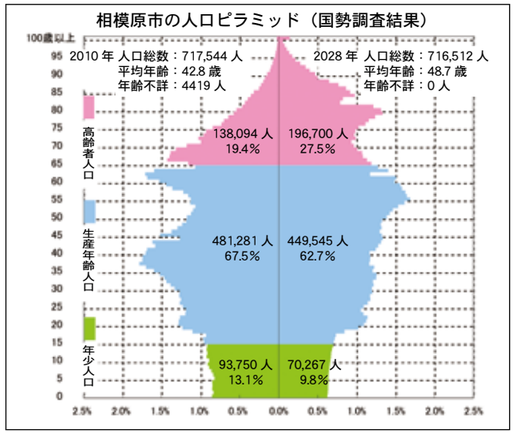
人口減少と高齢化 / 医療と福祉

人口は流入しますが現役世代は減少していき、社会の活力や労働力の確保、消費に与える影響等々にどのように対処していくか多くの課題があります。

相模原市の人口は、今後も緩やかな増加傾向が見込まれ、2021 年（平成 33 年）に 727 千人でピークを迎えると予測されていますが、生産年齢人口（15 歳以上 64 歳以下）はすでに横ばいから減少に転じていると推計されています。

労働力確保という観点では、高齢者と女性の活用があげられるでしょう。とりわけ女性就労の促進が望まれています。市の生産年齢人口に占める女性の有業者数は男性の６割程度にとどまっており、「短時間労働で条件が合う仕事であれば働きたい」という人はかなりいるはずです。職住近接型のまちづくりを目指すことで、女性の進出余地は十分見込めるでしょう。

一方、高齢化の進展により大きく変わると予測されている医療・介護関連支出の増加、その他の消費は減少、日用品全般に関わる市場の縮小が危惧されています。そのような中、健康で永く社会生活ができる高齢者は、医療や介護の消費が少なく、一方で女性の就業者増は、所得を得た人々により、新たな消費が喚起され、市内経済を活性化すると期待されています。コンパクトシティの推進は医療福祉分野や行政コストの軽減をもたらし、少子化対策となる子育て支援への配分を厚くすることで、新たな若年層を呼び寄せ、一層の女性の就労機会を後押しするといった好循環をもたらすと考えます。



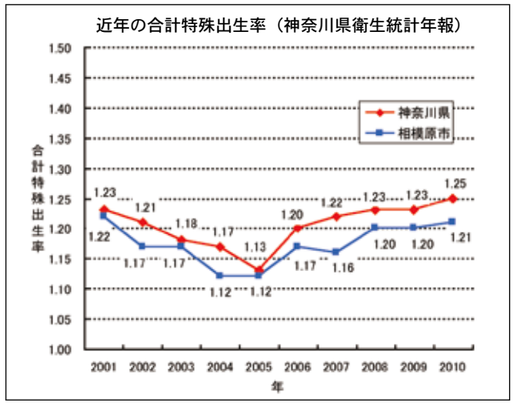
地域の維持と発展

少子化になると、家の中も街も社会全体も活気がなくなることが予想されます。しかし、子育てをしやすい社会環境をつくることによって、少子化を抑えることができます。そのためには日中、子どもを預かる保育園を増やすことが必要です。さらに重要なことは、雇用を保証し、産休、育休を十分に取れるような環境をつくることです。

その為に、常設の子育てサロンをつくって、地域社会から孤立している核家族を守り、楽しい子育て社会をつくる必要があります。

また、高齢者に対しても外出を促進し、地域から孤立しないように、バリアフリー環境をつくる必要があります。例えば、高齢者サロンをつくることは、身近に立ち寄る場所ができ、心のバリアフリーを実現します。

活気ある環境は、人の考え方、行動により変化をもたらすことができます。一人ひとりが率先してコミュニティに参加することが、明るい社会を築くことにつながると考えています。決して、経済優先、競争優先だけでは、豊かな社会を築くことができません。地域社会の中で、多くの人とコミュニケーションをとり、お互い支えあうことによってこそ、幸せな人生を送ることができるのでしょう。



壊せない建物から安心して暮らせる街へ

人口も経済も成長し続けた時代、街づくりも拡大志向で計画・実行されていきました。高騰していく地価に対してより効率的に地面を使おうと建物は上下に伸びていき、その結果高層ビルをはじめとする、壊せない建物（もしくは建設費の何倍もの解体コストがかかる）が建設されました。また生産コストや耐久性のみを追求したため、有害な物質を含んだ建材が使用された時期もありました。さらには利益のみを追求する無秩序な開発事業が、快適に暮らすための生活環境をも奪った例もあります。

30 年後、50 年後の安心・安全に暮らせる社会を考えるとき、今までの価値観を反転させた、人口や居住環境、地域特性、農業や工業などの生産性を考慮した効率的・効果的な都市計画が不可欠となります。

不公平な交通ネットワーク

ＪＲ横浜線、相模線、中央線、さらに私鉄では小田急線に京王線と、首都圏でも有数の鉄道路線に恵まれた相模原市ですが、緑区（主に旧津久井エリア）や中央区内の相模線の西に位置するエリアには、鉄道の恩恵を受けられない場所が存在します。そうした場所を補完するのがバスですが、利用客数の減少などを理由に路線を廃止し、不便な場所はますます不便になっているのが現状です。市では一部コミュニティバスなどにより対応を図っていますが、有効な解決策とはなっていません。

1. 誰もが生き生きと活動できる交通の実現
2. 安全な暮らしを支える交通環境の実現
3. 環境負荷の少ない交通の実現
4. 地域を活性化する交通の実現

などの要望に対して、より具体的な対応が求められています。

商業と生活難民

昨年の東日本大震災で事故のあった多摩境の「コストコ」が再開店しました。開店当日の午前中は、西門の交差点まで交通渋滞となりました。これらの現状から市内外の消費者の購買力は確かにあるということが理解されます。このパワーを市内商業者が、どのように受け取るかが今後の課題です。

都内の山手線一周（34.5Ｋｍ）と市内を囲むＪＲ横浜線・相模線・小田急線の外周は、ほぼ同じだと言われています。このトライアングルに、リニア中央新幹線新駅の橋本、小田急多摩線の延伸を目指す相模原、さらに来春複合商業施設のオープンする相模大野と、市内商業の活性化が図られます。

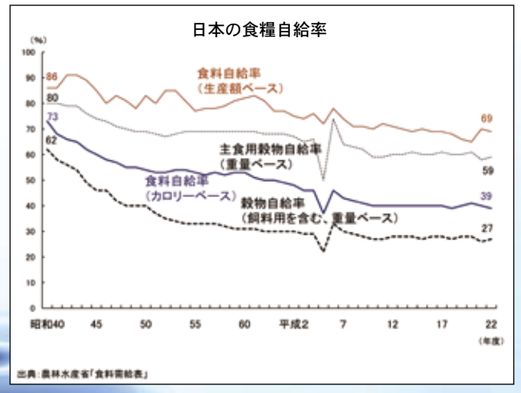
最近の情報端末の発展により、若者の多くがスマートフォンに代表する道具を使いこなしショッピングをする一方、地域には、対面販売に慣れた団塊の世代が流入してきています。また、商店経営者の高齢化は閉店・廃業を助長し、シャッター通り商店街を増やしています。交通手段があり、品物を求めて移動できる時代から、地元でしか買うことができない人々が多くなる時代が、これから来ます。こうした流れから生まれた、買い物難民となった人々をサポートするビジネスにもみられるように、多様化する消費者からの要望に対応する努力の出来ることが、今後の商業者に求められています。

環境共生 / 安全な水と食料

水：現在、相模原市内の上水道はほとんどが県水道によるもの。水道の蛇口に「安全な水」が届くまでの道のりは長大であり、恵まれた自然の賜物「水」を配給する水道施設の維持管理・更新には莫大なコストと手間・時間が費やされています。こうした背景のもと、あまりにも当たり前に手に入れている水ですが、その存在は想像以上に貴重です。地球上の「水」の総量は変わらず、人間やその他の生物が「利用できる品質の水の確保」は気候変動をはじめとする様々な理由で年々難しくなっています。

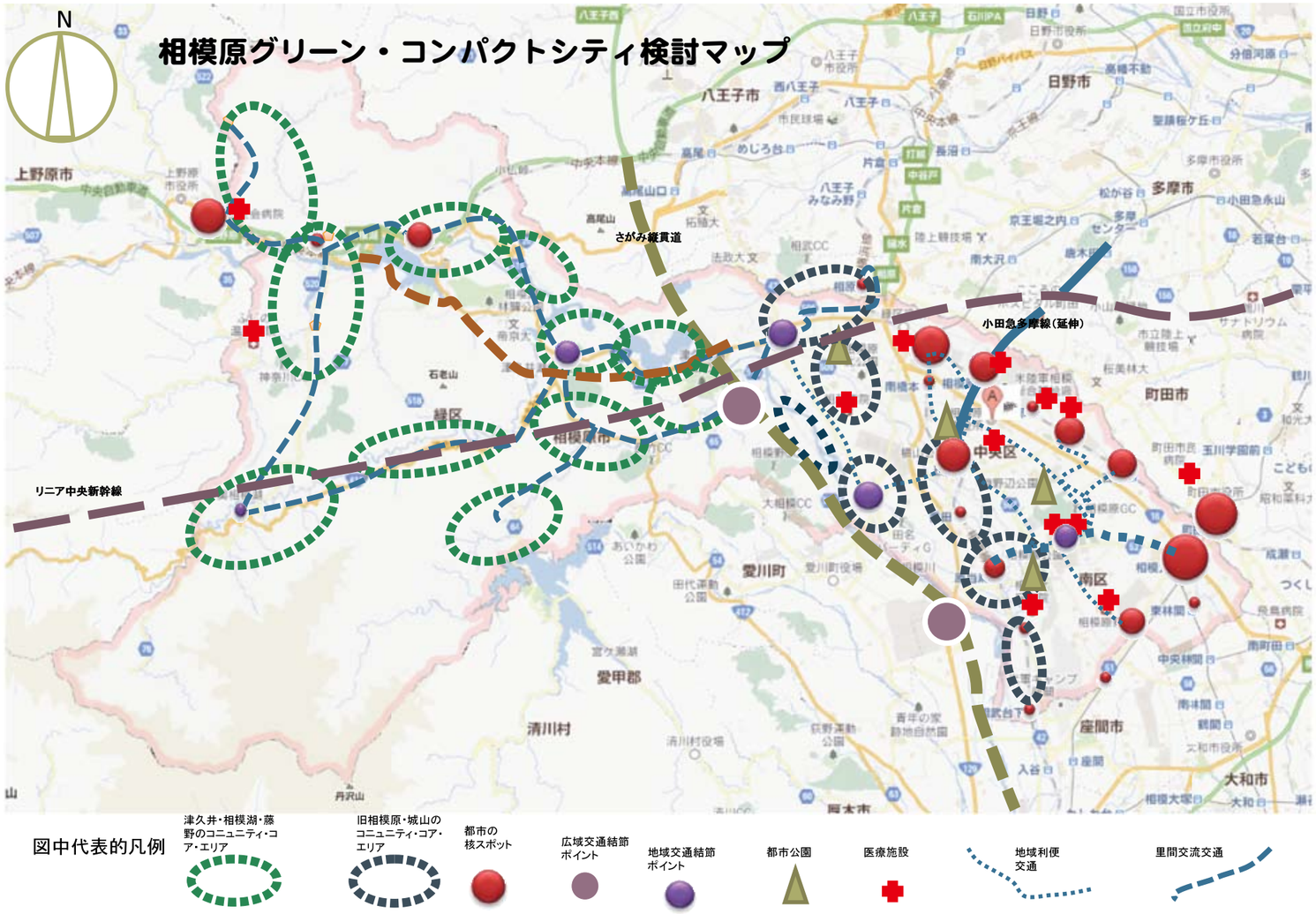
食　料：農畜産物、海産物の安全性については土壌、水、大気の成分、（広義の）農薬、肥料、飼料等々様々な要素が影響していることはよく知られていて、加工品も含めて研究や調査が行われています。一方、流通している食料の安全性については「信用するしかない」のが現状です。疑わしいものは「調達しない・購入しない」ことが、今のところ利用者としてはもっとも適切な対応です。新鮮で安心な食料を地域で確保できることが、理想です。

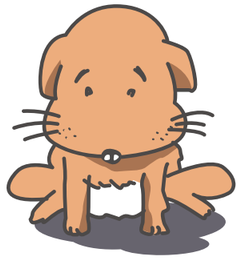
食料の「安全・安心」や「自給率」を考える上では、保健・衛生面、カロリー換算だけではなく、諸外国の様々な食料戦術も含め、多方面からの検討が必要となります。



相模原が目指す　グリーン・コンパクトシティとは

都市産業研究会（都産研）が考える相模原が目指すべき「グリーン・コンパクトシティ」は社会が変化する中、それを緩やかに受け止め、時代に“柔軟に対応し発展する”というものです。例えば、人口が減るエリアには、市内外から人が集まる仕組みをつくるという持続可能な地域を目指すことに他なりません。
先ず、相模原・グリーン・コンパクトシティの検討をする前に、グリーン・コンパクトシティのイメージについて触れましょう。この言葉は、海道清信氏が著書で触れている言葉です。そのイメージを簡単に表１「グリーン・コンパクトシテイのイメージ / 条件」で示させていただきます。
さて、都産研のグリーン・コンパクトシティの提案は、先ほどのイメージに相模原市の現状を踏まえて検討することを重視して作成したものです。市の都市計画マスタープランなどと一致する部分もありますが、特に私たちは、産業経済人の立場から、地域の活性化「暮らし」「なりわい」や市民生活の「生きがい」を生み出すには何が必要かという視点を中心に検討してきたものです。
また私たちは、街づくりを「ゼロからのスタート」させてとは考えておりません。これからの街づくりは、地域の現状や既存を活かし、組換え、集め、加え、時には引くことによって達成するものです。相模原全体（一部周辺関連地域を含む）に、あるべき姿を落とし込み、そこから見えてくるまちの将来の方向性を検討マップとして作成してみました。（図参照）





グリーン・コンパクトシティのイメージ／条件

1	自然環境、農地を大切にして効果的に使う
2	みんなの空間や建築物を大切に利用する
3	駅周辺に複合機能拠点をつくる（住宅だけでは街は活気が無くなる）
4	自動車交通利用は毎日使わない生活ができる
5	バスや電車などの公共交通をみんなで使う
6	楽しめるタウンセンターを目指して盛り上げる
7	歩ける範囲に区の出張所や幼稚園や保育園、老人のデイサービスセンターや店舗、銀行などがある街
8	病院や役所、市民ホールや図書館そして住宅の開発などをこれ以上分散させない
9	ばらばらになった街の機能を駅前等を中心に集め直す
10	すぐ近くに林や公園がある子供やお年寄りに優しい生活空間にする

参考文献：海道清信 (著) コンパクトシティの計画とデザイン

検討マップから見えてきた点

以下の項目は検討マップから見えてきたポイントです。上記のグリーン・コンパクトシティの条件を意識しながら、相模原にふさわしいまちの将来像に重要と考えられるポイントを「どのような考え方が必要か」といった視点で挙げてみました。

- 相模原市および連携や関連のある地域との特色のあるコア地区が、そこに育まれているソーシャル・キャピタル（信頼・絆など）の醸成をどのように育むかが必要条件
- 旧相模原エリアにおいては、２つの都心エリア（橋本 / 相模原エリア、相模大野 /（町田）エリア）が市の都心部イメージ
- 旧相模原エリアでは都心エリアを含む核スポット（駅）から伸びる放射状アクセスでそれぞれの交通結節ポイントやコア（核）地区を結ぶ
- 旧津久井エリアでは、そこに根差す自然、歴史、文化といった資源を意識しつつ、地域のコア地区にまちの利便機能を集める
- 旧津久井エリアの交通計画は、それぞれの地域のコア地区を回遊公共交通が結ぶことにより、市内外の利便性に寄与させると同時に活発な交流を喚起し、交流人口の増加を目指す
- 相互補完ではなく、相乗効果としてまちを活性化（市街地では商業・業務・研究・工業エリアはより高度に集積促進。歴史・自然エリアは人を呼ぶ仕組みである観光動機を生む地域資源を磨く）
- コンパクトシティの条件を意識し、それぞれの地区にふさわしい「らしさ」を発掘、発見、琢磨し活かす（地区の人口流入を促し、雇用創出対策）

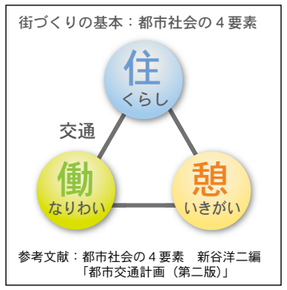
「さがみはら・グリーン・コンパクトシティ」を実現する為、強化する方向性の提案

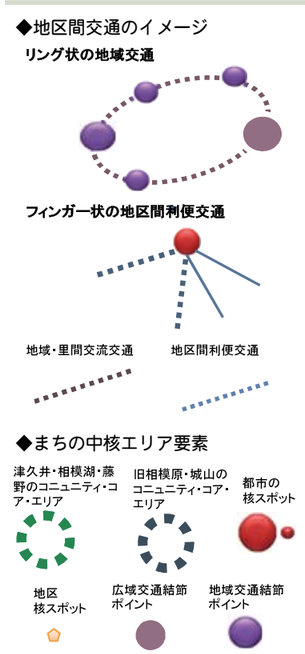
検討マップを模式的に分解してみると課題や方向性が見えてきました。都産研では幾度となく津久井地域を含む相模原市域の現状を調査し、新都市を実現するには、サステナブル（持続可能）なまちであることを認識しています。真のサステナビリティ（持続可能性）とは環境保護だけではなく、「生活面（くらし）と経済面（なりわい）、憩（生きがい）」が組み合って成り立つと考えます。そのために、都産研が先に示した、さがみはら・グリーン・コンパクトシテイを実現するとき、いくつか課題を解決していく必要があります。さがみはら・グリーン・コンパクトシティの概念図では以下の課題や対策案を模式図でご提案いたします。

都市社会の４要素（住 - 働 - 憩をつなぐ交通）の構築再点検

人間が都市の中で生活するためには、住まい、働き、憩いを交通という要素が結ばなければ成立しないと考えます。

都産研のさがみはら・グリーン・コンパクトシティでは住・働・憩を地域のどこにとらえ、そこを結ぶ交通をどう考えるかで表現しました。「住」には生活利便を、「働」には都市経済を担う大中小企業の活性を生み、「憩」は市民・生活者にリクリエーションやうるおいを与える機能です。そして、これらを効果的に「交通」というサービスによりバランスある街づくりを実現させることを基本にしています。その方法は市街地エリアと、津久井エリアとは異なった考え方が必要と考えました。





- 人が使いやすく、人を呼ぶ交通利便の再考築⇒公共交通駅の無いエリアに充実した陸上交通結節点を設置、人が利用する場所をつなぐ「便利新発想交通」を整備。

旧相模原エリアの交通網の考え方	駅からフィンガー（放射）状に地区核や交通結節点を結び、くらし - なりわい - 憩を結ぶ交通再構築
津久井エリアの交通網の考え方	リング（回遊）状地域交通により居住者だけでなく来訪者の地域回遊観光も視野に入れ、くらし - なりわい - 憩を結ぶ交通再構築
既存都市機能のモール化	医療施設の集積を（データ）通信・交通で結ぶ総合医療モール都市に寄与できる交通構築により地域力アップ

- 地区の眺望・景観、文化、科学、歴史情報発信に資する「まち自慢拠点」をアピールし琢磨するまちづくりにより、新たな雇用創出と地域活性に寄与させることを目的化。地区の「らしさ」をまちづくりの軸とし「さがみはら自慢」をアピール。そして何よりも重要なのはこれらをいかにリンクさせ、ネットワーク化すること。「地域特産消費と地域観光動機」を増加し新たな経済を創出。

相模原の重要文化的都市景観		相模原にいる景観シンボルとして「丹沢・大山そして津久井の山々」の相模原特有の眺望景観の重視
テーマスポットのネットワーク化	ネットワークの例	ＪＡＸＡ(注1)、博物館、水族館、遺跡などの施設観光ネットワーク
		桜並木、相模川、段丘緑地と公園、相模湖などの自然ネットワーク
		小原宿、尾崎咢堂記念館、藤野（佐野川や篠原など）の里山、青根小学校などの歴史と風土ネットワーク
		100 年以上続く和菓子や、地酒などの特産品ネットワーク

- ＢＣＰ支援に資する市の防災支援都市化を促進し、単なる防災バックアップだけでなく産業基盤や日本や世界レベルの研究開発機能を持つ進出企業の立地を促す。これらにより新たな雇用の創出、特色ある産業の集積、拡大を促進。

安全安心を備えた産業誘致策（例）	ＪＡＸＡ、相模原市立博物館、データーセンターが集積する旧キャンプ淵野辺跡地にはＢＣＰ(注2)機能を備えた安全安心な「新研究開発企業立地」の創設（ＢＣＰで重視すべきもの：耐震化、交通、電源、情報通信網維持や帰宅困難対策など）

- 過疎地への交流を促し来訪者の増強に資する公共交通を絡めて再検討。地域公共交通の存続を前提とし、例えば地域コアとの連動性するＢＲＴ(注3)駅にのみ基本的に停車させるといった経済効率や定時性確保を意識した交通システムにチャレンジ。
- 相模原の都市部から里そして大自然という自然環境階層にふさわしい自然とのかかわりを意識し、都市の街路樹や河岸段丘部のグリーンベルト(注4)、都市や自然公園のネットワーク、里山、人工林や原森林を大切にする「生物多様性に富み、自然資源の管理活用のまち」として、持続可能でコンパクトな「さがみはら・グリーン・コンパクトシティ」を発信。

ユビキタス(注5)交流ネット	情報の地域差を解消するＩＴ技術によりスマートフォンや各公民館や学校などに交流ネットの構築 市内外の来訪者などにも活用できる故郷観光支援ネットとしても活用
公共交通のデザイン性重視	地域交流ＢＲＴを外部利用者目線で、レトロやおしゃれな感覚のデザインで話題作り（例えば、路線ごとに色やデザインの異なる富山市Ｔｒａｍ(注6)）

注 1）宇宙航空研究開発機構
注 2）大規模な災害・事故・システム障害が発生した場合に、企業や行政組織が基幹事業を継続したり、早期に事業を再開するために策定する行動計画。事業継続計画。出典：大辞泉
注 3）道路上に専用軌道を設け、複数の車両を連結したバスを走らせる交通システム。出典：大辞泉
注 4）都市計画で、都市の環境を守るため緑地とした地帯。出典：大辞泉
注 5）ユビキタスとは、それが何であるかを意識させず（見えない）、しかも「いつでも、どこでも、だれでも」が恩恵を受けることができるインターフェース、環境、技術のことである。『ユビキタス社会』のように言葉を連ねて使うことが多い。（参考：フリー百科事典『ウィキペディア』）
注 6）次世代路面電車　出典：ウィキペディア